

---

# 境守

八尾利之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

境守

### 【Nコード】

N0397F

### 【作者名】

八尾利之

### 【あらすじ】

人と人外を区切る「境」を維持する境守と呼ばれる仕事を生業としている土宮要は、明治に入り境守が激減している原因を探るため各地を旅していた。訪れる場所の境はいずれも朽ち果てており、住んでいる人々は人外の生き物に侵食されつつあった。そうした現状を目の当たりにした土宮は、その裏に隠された思惑を突き止めるため単独で人外の故郷と言われている里を目指すが……。

## 第1話

土宮要は屈み、ほどけた靴紐に手を伸ばしかけてやめた。すぐに脇に道祖神があつたからだ。コケに埋もれてマリモのようになったそれは、杉の森林と人道との境にひっそりと佇んでいた。土宮でなければ見つけることもできなかったであろう。紐がほどけたのも、感応したからに違いなかった。

耳を澄すと、プツプツと泡立つような微かな音がする。石の言葉を理解するのは難しい。獣のほうで、声や態度を出すぶんずつと楽だ。石は聴こうとしない者にはなにも語らない。聴こうとしている者にさえ、プツプツと独り言のように話しかける。聞き手のことなどまったく無視して、存分に話すと黙ってしまふ。だから一度聞き逃すと、次に石が話したくなつたときまで待たなければならぬ。

土宮は目を閉じて石の言葉に神経を集中させた。石の言葉は決してどもらず、区切りもなく、よどみなく続く。声は破裂音の連続で、音の強弱や間隔、同時にいくつ破裂させるかで意味が決まる。人ほど言葉は発達してないので、作られる文章は原始的だ。しかし音楽的なその声は土宮の脳裏に古い記憶を思い起こさせる。それは家においてあり、廊下を駆ける足音であり、雨の音であった。

道祖神の会話を聴き終わつたあと、土宮は脇に避けて湿つた苔の上に腰掛けた。背負っている行李を降ろし、靴紐を結び直した。次いで煙管を取り出し、煙草を詰める。煙草は湿気っていて、火種に近付けてもなかなか火がつかない。イライラしながらめり込むように火種を押しつけてなんとか火をつけた。

一息ついた土宮は行李から薄い和紙を取り出した。和紙は雲のように白く、かざすと向こうの景色が透けて見える。それを行李の上で細長い折り目をつけると、慎重に割いていく。

バラバラになった紙を今度はからめるように折合わせて行くと、やがて手のひらに乗る角張つたしめ縄が出来上がった。土宮はさら

に二枚の紙を使って人形を二体折ると、それらを道祖神の前に並べる。

道祖神は祭られたがっていたのだった。土宮より遙かに長く生きていて、外見は丸みを帯びた石に近く、全身を植物の苗床にしているこの人造神は、唯一人によってのみ慰めを得るのである。並べた紙は瞬く間に地面から水を吸い上げ、重そうに透き通りながら不安定に揺らめいている。道祖神はプツプツと喜んでいた。

土宮は再び道を歩き始める。もうすぐ目的地なはずだった。

やがて杉林の中に埋もれるようにそびえる鳥居が見えてきた。緑色に染まった鳥居は無理矢理ねじ曲げて門状にした木のように見える。下部は土と同化していた。鳥居独特の鮮やかな朱はまったく見えず、苔の隙間からのぞく木の表面は変色しており、一匹の黒い虫がもろい表面をえぐって懸命にもぐるうとしていた。

「ひどいな」

土宮は思わずつぶやいた。鳥居を境に杉林は切れて田んぼが広がっていた。数件の小屋があるものの人影は見えない。緑色の海に浮かぶ島のように林がこんもりと群生しているため、村の全体像を把握するのは難しかった。村の背後にはかぶさるように丸い山がだらしなく広がっており、村の半分近くを影で覆っている。土宮は鳥居に近づいて、湿った表面を観察した。指をひっかけてみると、苔がベロリとむけて彼を驚かせた。内部は完全に腐っているようで、少し押しただけで笑うように揺れる。

やはり、ここも放置されているのか。

鳥居の崩壊具合は、見るからに修復不能に思えた。建て直すには半月は必要になるだろう。しかし問題はそこではない。

村民の姿が見えない理由が、土宮には想像できていた。今までの経験からいって、この状況は最悪だ。鳥居は役目を果たしていなかった。それがなにを意味するのか、境守を司る土宮には考えるまでもなかった。

もう、手遅れだ。

しかしそう思いながらも、土宮は手近な家に向かって歩き出していた。

家は不自然なほど嚴重に閉ざされていた。木戸は隙間もなく、煙が屋根を伝って出ていく口すら閉まっている。

土宮は唇を噛み締めた。いつからこのようになっていたのかはわからないが、家は半分苔に没しており、戸が開けられた形跡がないことから、かなり長い間放置されていることが推測できる。恐らく中に籠っていた者たちは生きていないだろう。土宮はそれを確認する勇気が持てず、なかなか戸に近付くことができなかった。しかし生きているかもしれないという可能性も捨て切れず、意を決して戸を叩いた。

「誰かいますか？」

返事はない。再び戸を叩き、強い口調で呼び掛けるが、それでも中は時間が止まっているかのように静かだ。

恐る恐る戸に指をかけ、力をこめる。と、なにかが引つ掛かり、びくともしない。土宮は大きな息をはきだした。

山の背が伸びて、影が土宮のところまで伸びようとしていた。村から見上げる黒い山肌は、恐ろしくゆっくりと迫る津波を彷彿とさせる。波打ち際は狭まり、村は黒い波に飲み込まれていく。土宮は影から逃れるように来た道を歩きはじめた。この場で相手の領分に入るのは危険だ。鳥居が役目を果たせなくなっている時点で、境守としての役目は終わっている。土宮は狩人ではないのだ。

道祖神のいるところまで戻って、ようやく息をついた。暗闇は杉林も覆っていたが、恐ろしいものではなくなっていた。土宮は行李を降ろし、道祖神の横にある平らなところにむしろを広げた。そこにランプを立て火をつける。土宮の周りがぼんやりと染まり、囲む闇が濃くなった。道祖神がプツプツとなにかを言っているが、土宮は聴く気力がなかった。彼は数枚紙を取り出し、筆で呪文を書き入れた。これはしめ縄の役目を果たす。つまりは結界である。これを四方に貼れば、蚊帳の代わりになるのだ。

寝床が確保したあと、行李から干し芋を取り出してかじりながら横になり、村のことを考えた。

一体なにがあったんだ。

この地区の村はほぼ全滅だった。人もおらず、家だけが残されている。わずかに助かっていた村では、人々は揃ってこう訴えた。

「境守がいなくなっちゃった」

いなくなった理由は不明。そこが土宮にはわからない。境守が理由もなくいなくなるわけがないし、そもそも一人の人間が突然行方不明になるのは不可解だ。なにか事件に巻き込まれたと考えるのが妥当だろう。

わからないのは、それら原因を警察がまったく調べていないのほどういうことだ。境守の組織はなにをしているのだろう？ まさか把握していないということはあるまい。

あるいは、触れてはいけないものがあるのか？

ランプの炎が黒い煙を吐き出し不意に消えた。一瞬で暗闇になった中で、木々のざわめきも虫の鳴き声もない中、道祖神のつぶやき声だけが土宮の心をかき乱していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0397f/>

---

境守

2010年10月11日20時23分発行